

論文

「白蛇伝」にみる近代の胎動

京都学園大学 経済学部

川田 耕

要 旨

古代にあって蛇は人類の様々な想像力を喚起してきたが、中心にあるのは人を誘惑し、騙し、命を脅かす、おぞましくも蠱惑的なイメージであった。古代中国では、蛇身の女媧と伏羲が人間創造の神とされたが、天ならびに皇帝を象徴する龍と分化して、中世になると蛇はもっぱら得体の知れない化物となって、生殖と死の不気味な象徴となった。近世に入り社会の国家化が進み文化が洗練されていくなかで、いわゆる「白蛇伝」が生み出されていく。白蛇の化身である白娘子は、許宣という若く平凡な男を誑かし死にいたらしめようとするが、法海禅師とその一党によって雷峰塔の下に鎮圧される。それはいわば国家-社会システムの全面的な勝利を象徴するかのようである。しかし、儒教的な権威的イデオロギーが空洞化していく明末以降清代にかけて何度も語り演じ直されるなかで、日本に渡った「蛇性の淫」等とは異なり、白蛇は次第に男を一途に想う人間的な一人の女となっていく。なかでも、法海との対決は一番の見せ場である「水闘」の段としてより劇的になり、道徳的で抑圧的な秩序を破壊しようとする、かつてなく激しい女の怒りの表現がみられる。この頃には白蛇は仙界から投胎されたものと理想化され、さらには状元となった息子との再会を待ちわびる等身大の母親の姿にすらなる。これは、国家的・男権的な秩序と性愛的な関係性とが対立したものとされるなかで、男女相互の欲望のありようが洗練され、親密さを感情と価値の中心とする新たな私的領域が生み出されていったことを示していると思われる。これらの一連の物語の発展・変容には、父権的な社会・家族構造とイデオロギーの裏側に育った、性愛と生命の流れへの民衆的で非言語的な創造の力がみられるのであって、そこに近世中国社会の近代への胎動が見てとれる。

キーワード：蛇、龍、国家化、近代性、異性愛、生命の流れ

1 古代・中世の中国における蛇の象徴性

1-1 豊饒なる祖先神としての蛇

蛇は、中国では聖なる動物として広く信仰の対象となっていたようだ。呉越地方や東北地方には新石器時代にすでに蛇信仰があったことを示す遺物が多く発見されている。浙江の古代越人が蛇を崇拝していたことは文献にみえ、今日でも浙江を含めた江南には蛇崇拝の習慣が残っているという。かつての閩（今日の福建省辺り）の人々も、後漢の文献では「蛇種」、つまり蛇の子孫とされ、近年まで広く蛇信仰が続いてきたらしい。他の漢民族周辺の少数民族である黎族や壮族、あるいは中国西南部の水上生活者らにも広く蛇信仰がみられた¹。

また中国の神話のなかでは、女媧が人類を創造したとされているのだが、この女神は、よく知られているように、「人面蛇身」である。漢代以降の図像では、この女媧と、やはり人面蛇身の伏羲という男の神とは、その蛇身の部分で絡まりあっているパターンが多く、二人は生殖行動をしているようにみえる。すべてを呑み込んだ大洪水のあとに生き残ったのはこの二人だけとされ、二人は兄妹とも姉弟とも夫婦ともいう。つまり、新たな世界で人間を生み出したこの豊饒の神たちは、蛇の姿をしていたのである。あるいは、天地開闢の神である盤固は、龍の頭に蛇の体などとされている²。

その姿形が独特に不気味で猛毒を持つものもあることなどから考えると、蛇が崇拝の対象となるというのは現代人には奇妙な感じがする。しかし、蛇信仰は、はるか昔の中国ばかりではなく、むしろ過去の人類にはほとんどすべての地域で何らかの蛇信仰があったようである。とくにインドには、蛇神の「ナーガ」をはじめ、蛇への多様な信仰の文化があったようで、日本でも、「縄文時代から蛇を信仰していたことは明白」³などとされる。これらの信仰のなかでは蛇は、新しい何かを生み出すもの、生命を育むもの、といった豊かな生産性を象徴する場合も多く、時に不死性をも体現し、さらには世界の創造、人類の誕生に関わるとされることもある。おそらくは、蛇の姿形が男性器にも女性器にも似ており、交尾が長時間に及ぶこと、あるいは脱皮を繰り返すことなどから、蛇は多くの文化においてこうした豊饒な力を体現・象徴するものとみなされてきたようだ。

もともと、キリスト教の強い西洋世界では、蛇はそのような豊かさの象徴とはならず、むしろ不気味なものの象徴であり続けたようだ。よく知られているように、聖書では蛇は悪魔の化身であって、イヴに知恵の木の実を食べるようにそそのかして、人類は楽園を追放される。以降、西欧では蛇は不気味なもの、とりわけ墮落と死に結びついた呪われた象徴であり続けた。心理学者のユングは、次のように蛇の象徴性を解釈している。「蛇は無意識のすぐ

¹ 姜彬『呉越民間信仰民俗』『姜彬文集』第三卷、上海社会科学院出版社、2007年、何錦山『閩文化統論』北京大學出版、2004年、諏訪春雄「中国江南の蛇信仰と日本」『調査研究報告』第37巻（学習院大学）、1992年、等。

² 袁珂（鈴木博訳）『中国の神話伝説』上巻、青土社、1993年、伊藤清司『中国の神話・伝説』東方書店、1996年、等。

³ 吉野裕子『蛇 — 日本の蛇信仰』講談社学術文庫、1999年、306頁。日本における蛇信仰については他に、同『日本人の死生観 — 蛇 転生する祖先神』人文書院、1995年、網野善彦・大西廣・佐竹昭広編『瓜と龍蛇』福音館書店、1989年、谷川健一『蛇 — 不死と再生の民俗』富山房インターナショナル、2012年、等。

れた象徴であり、予想しないときにいきなり現れる、割りこんできて苦痛を与え危険を招く、不安をかきたてる、などという無意識の性質を表す」⁴。このように蛇が人間の自分自身の恐ろしい無意識の象徴となる傾向は、西洋世界ではとくに著しいが、西洋以外の人々も蛇の気味の悪い姿形には、自らの内なる十分には自覚できない不安・恐怖を容易に投影してしまうことが多いと思われる。同時に、かつての中国などにみられるように、蛇は豊かな生産性を体现するものとされることもあって、例えば、ユング心理学者であり神話の分析で知られるノイマンもまた蛇（とくにウロボロスのイメージ）に注目して、蛇を自己増殖的な永遠性の象徴と解釈している。「蛇は男でありながら女であり、孕ませる者でありながら孕む者であり、呑み込みかつ産み出し、能動的でありながら受動的であり、上でありながら下である」⁵。蛇は不気味に人を脅かすが、同時に生命を生み出す豊饒さの象徴とされてきたのであり、そのような両義性はユングらの想定する元型としての「太母」に相応しい。じっさい、ユングはこうも言っている。「蛇は、殺すと同時にわれわれを死から守る唯一の可能性でもある「母」（およびその他のダイモーン）という気味の悪い神霊の化身である」⁶。

人は蛇という形象に、自らの無意識的な不安や恐怖を感じるのだが、さらにその奥には善も悪も飲み込む「母」への魅惑と恐怖とがある、というわけだ。だから、中国の人々を含めて多くの民族が、蛇に畏怖と尊崇の念を抱いて、自分たちの祖先を蛇と想像したのは意外とすべきことではないのである。

1-2 蛇から龍へ

蛇は、このように、恐ろしく不気味でありながら、生命の豊饒さの象徴でもあって、それゆえに畏怖と尊崇の対象であったのだが、しかし、人類のある段階で蛇を豊饒の神などとして崇める文化はある程度衰退していったものと思われる。その代わりに、しばしば龍あるいはドラゴンなどとよばれる、蛇に似ているが角や足などがある形象が世界中で広く想像され尊重されるようになり、漢民族においては「龍」はとくに好まれることになる。

はやくも夏王朝の紋章は龍であったことが遺物からわかっており、殷・周の時代には夔龍紋（きりゅうもん）などの龍の模様が多く残っているが、それは蛇身を装飾的に理想化したものであると推測されている。神話の世界では、蛇は龍と混同されていることが多く、女媧と伏羲、あるいは盤固も、蛇身とも龍身ともされている。おそらく蛇と龍との象徴的な意味が大きくは違わなかった段階・場合があったのだろう。しかし、三皇五帝の伝説において、彼らの多くは龍体とされ、もはや蛇身ではなく、五帝の一人である黄帝と激しく争って最後には首を斬られた蚩尤は蛇身であったなどということから、龍はある段階からは蛇から分化してより力強く権威あるものになったと考えられる。五帝の一人舜は、母が虹龍によってみごもった聖なる帝であり、一対の龍の描かれた玉座に座っていたとされ、龍は「天」の、あ

⁴ C. G. ユング（野村美紀子訳）『変容の象徴』下巻、ちくま学芸文庫、1992年、181頁。

⁵ エーリッヒ・ノイマン（林道義訳）『意識の起源史』（改訂新装版）紀伊國屋書店、2006年、40頁。

⁶ 『変容の象徴』下巻、46頁。

るいは天子・皇帝の象徴となっていく。漢代になると仏教の影響もあって龍のイメージがほぼ決まっていたようだ。龍は春分とともに天にあがり秋分とともに地に潜るなどとされて、天と皇帝の象徴となり、漢民族は蛇よりもむしろ龍の子孫とされることが多くなっていく。つまり、蛇はかつては世界と人間を創造した祖神であったのだが、文化の変転のなかで蛇が理想化されて生れた龍が、天や皇帝と結びついて、本家の蛇が体現していた祖先神としての權威を奪っていったようである。

なお、龍は蛇と同様に当初から水神でもあった。舜から帝位を譲られた禹は治水を行ったが、その際、龍に乗っており、また禹の字は雌雄の龍を意味するという（白川静『字統』）。古代中国にあっては帝王たるもの治水を成し遂げなければならず、それゆえ龍を操る必要があり、そのことから龍が天子の象徴ともなっていた、とされる。唐代以降の文献にみえる龍王（龍君、龍神とも）なるものは海神であり水神でもあった。また唐代には、「龍女伝説」、つまり龍女が人間の男と結婚して水害が治まった話や、「河伯娶妻」の伝説、すなわち龍が人間の女を娶る話も広く存在した。いずれにせよ、龍は川の支配者であり、したがって古代の国家の命運を握る特権的な形象なのである⁷。

1-3 不気味さの象徴としての蛇

古代中国文化の時間の流れのなかで、龍は大きく強く羽ばたいて天と皇帝の象徴にまで昇っていった。対照的に、蛇は世界と人類の創造者から転げ落ちて地を這う不気味な存在へと貶められていく。だが、中世 — 内藤湖南ら京都学派にしたがって、後漢以降、宋代より前までを中世としておこう — 以降の物語のなかで活躍するのは龍ではなく、蛇である。龍は、理想化されて皇帝権力に取り込まれてしまったがゆえに象徴としての豊饒さを失い、蛇はその本来の不気味さを取り戻して豊かな意味性をもつようになったようだ。

『搜神記』（晋代の于宝の著作で、そこに記された説話の多くは民間伝承に基づくものだろうとされる）には、龍の説話もいくつかあるが、蛇についての説話が突出して多い。そこでは蛇の出現が吉兆とされたり親孝行な蛇などもでてくるが、それ以上に、王朝の崩壊を予兆するものとされるとか、蛇同士の喧嘩が争乱や災害を予兆する、あるいは恨みをもった蛇が人に祟るなど、端的に不安をかきたてる象徴となっている。例えば、老婆に餌を与えられていた蛇が、老婆を殺した知事に「母の仇を討ってやる」といって、町ぐるみ陥没させて湖にしてしまう、という話がある（巻二十）。蛇が、人間的な情を持つと同時に、恨みをもって人に祟るというおぞましい水神の類であることがよく示されている。

また、『搜神記』には次のようなプロットの蛇に生け贄をささげる話もある。

東越閩の大きな山に大蛇が住みついていて、毎年八月一日、生け贄となった童女たちを呑み込んでいた。この人身御供はすでに九人にもなっていた。ある年、李誕の娘寄が、父母のために殺潰し

⁷ 中野美代子「龍の聖と俗」フランシス・ハックスリー（中野訳）『龍とドラゴン — 幻獣の図像学』平凡社、1982年、澤田瑞穂『中国の民間信仰』工作舎、1982年、笹間良彦『龍とドラゴンの世界』遊子館、2008年。

の自分が生け贄となると申し出て許された。李寄は、犬に蛇を噛ませたうえで剣で蛇をきりつけて殺した。越王はこのことを知り、李寄を后とした（巻十九）⁸。

大蛇が若い女を生け贄に求めることを発端とする話は中国では広くみられ、日本でも八岐大蛇伝説にはじまり説経節の「松浦長者」など、よく似た話は多く記録されている。

これらの中世の蛇をめぐる話において、蛇はもはや聖なる祖神などではもはやなく、多くの場合不気味で貪欲で暴力的なものとなっている。しばしば蛇が体の内部（喉や脳）に侵入して害をなすとされることも考え合わせると、やはり蛇とは、ユングらの言う通り、受け入れがたい自他の欲望が投影されたものだと考えられる。しかし同時に、古代の蛇が体現していた世界と人間の創造主という象徴性も、物語のなかにかすかに残っていることがある。先の「李寄」の物語も、蛇と生け贄の少女たちとの間にある種の性的なつながりがあったことを伺わせる。また、「蛇郎」という蛇が婿入りする系統の物語は相当に長く広く伝わってきた（もっとも、その起源が中世にまで遡れるのか、わからない）。これは、末の妹が、蛇に求められて結婚して意外にも幸せになるが、妬んだ姉が妹を殺して妹のふりをして蛇と暮らす、しかし妹の生れ変わりに復讐される、といった話である⁹。この「蛇郎」では、蛇は得体のしれない貪欲な化物のようでありながら、実は若い女の結婚相手としてふさわしい、幸せをもたらす存在なのである。「李寄」と「蛇郎」などをあわせて考えれば、中世の蛇たちは、荒々しい暴力的・男性的な欲望の象徴であるが、それは共同体と女たちにたいして破壊と生産の両方をもたらしえる両義的な力をもっていると考えられる。

2 近世における蛇＝女の物語の発生

2-1 周縁化された蛇と女

宋代以降の近世に入ると ― 再び内藤湖南らに従って、近世を宋代に始まるものとしよう ― 、蛇をめぐる話の種類は目立って増えてくる。多くの記録が後世に残ったということもあろうが、話のパターンが増えていることがわかる。

とりわけ、様々な逸話を収集した南宋の洪邁の『夷堅志』には、蛇の話が多くみられる¹⁰。「蛇妖」は蛇が村の女を襲って犯した話を複数伝え、男にばけて人妻を犯そうとした話（「余干民妻」）や、大蛇が農婦をさらった話（「巴山蛇」）などがあり、それらは中世の不気味で男性的な蛇の同類にみえる。さらに蛇の恐ろしさは誇張されて、蛇は時に人の命を奪い、なかには蛇の崇りで何百人も死ぬ話もある（「易村婦人」）。ただし、『夷堅志』に登場する蛇たちは、全体に邪悪なばかりで、中世の物語になお潜在していた豊饒性を感じさせず、物語全体もエピソード的で象徴的な力を欠いているように思われる。また、物語のなかで邪

⁸ 黄鈞注訳・陳満銘校閲『新訳搜神記』三民書局（台北）、2009年、竹田晃訳『搜神記』平凡社、2000年、竹田晃・黒田真美子編・佐野誠子著『中国古典小説選』第2巻、明治書院、2006年。

⁹ 中国全土の民話を収集すべく現在刊行中の『中国民間故事全書』（知識産権出版社、北京）をみると、全国各地に「蛇郎」の物語が伝えられてきたことわかる。日本でもほぼ同様の話が全国で採集されている。

¹⁰ 何卓校注『夷堅志』（全四冊）、中華書局（北京）、2006年。

悪な蛇がしばしば世俗的・国家的な力によって退治されてしまう展開のものも多い。例えば、「同州白蛇」では、白蛇の精が同州の官民に災いをもたらし、宰相の娘婿が天師に請うて白蛇の精とその子孫を退治しているし、「成俊治蛇」にみられるように、蛇を退治することをもっぱらとする軍人が登場したりもする。蛇はもはや豊饒の神でもなければ、人智を超える不気味さすらも乏しくなって、退治されて当然の矮小な存在になっているわけだ。この蛇の凋落に、簡単にいえば、近世中国の国家化による社会の安定の反映をみてとれるだろう。

その一方で、近世に入ると、蛇をめぐる物語は新しい展開を示すようになる。端的に言えば、蛇は人間の女を象徴するようになるのだ。より正確に言えば、蛇の形象は依然として共同体の外部から共同体と人を脅かす恐怖の象徴であると同時に、言語化されがたい屈曲した女たちの深情を代理的に表現するようになっていくように思われる。龍が、国家-社会システムの頂点に君臨する男性権力者の象徴となったのにたいして、蛇は時間をかけながら、国家-社会システムのなかで周縁化され抑圧された女たちの、非言語的でありながらよくできた象徴となっていったようなのである。

記録に残っているもののなかで、そのような意味での蛇＝女を登場させる先駆的な物語は、「李璣」であろう。これは唐代の『博異志』のなかに記された物語で、もとは唐代の作者不詳の伝奇小説「白蛇記」として流布したもので、この「李璣」が「白蛇伝」の祖形とされることもある。次のようなプロットである。

唐の元和二年、李璣という名の男が長安の市場近くで白衣の美女を見初める。侍女にきくと後家でお金に困っているというので、錦繡を貸すと、家に招かれる。さらに三万銭の金を与え、誘われるままに三日間女とすごす。帰宅すると体が生臭くなっていて、疲れて寝たら、体がとけて頭だけになってしまった。家人が女の家のあるはずの所に行くと、樹があるばかりの空園であったが、樹の周りに三万の銭が残されており、近所の者によると大きな白蛇がよく出没するという。

別伝も記されており、大筋は同じだが、最後に、家人が女の家のあるはずのところにいくと枯れた樹があつて、そこには大蛇がとぐろをまいた跡があつて、木を切ると、小さい白蛇が何匹かいたので、皆殺しにした、という¹¹。

この「李璣」の物語にあつて、白衣の美女の正体が蛇であることは明言されていなくても読者には明らかである。しかし、この簡潔な物語は、蛇＝女が、なぜ男を拐かしたり、大金を掠め取ったりするのか、そのような蛇＝女の事情にはいっさい言及することはない。こうした理由のない蛇＝女の邪悪さは、当時の中国における露骨な女性への蔑視と恐怖にもつながっているのだろう。例えば、前漢の『列女伝』で語られる悪女たちとは、紂王の後姐己や周の幽王の後褒姒など、おしなべてみな、男を性的に誘惑し墮落させ、その社会的な力や生命さえをも奪う恐ろしい形象である¹²。「李璣」の蛇＝女はまさにこうした悪女の極端な姿と

¹¹ 潘江東『白蛇故事研究』上巻、学生書局（台北）、1981年、南條竹則『蛇女の伝説』平凡社、2000年。

¹² 劉向（中島みどり訳注）『列女伝』第3巻、平凡社東洋文庫、2001年。

共振する形象であって、この物語は、その意味で「李寄」や「蛇郎」と同じように中世的な恐怖の物語であるといえる。

この唐代の物語は、蛇が女に化ける話という点では記録にある限り孤立したものであるが、宋・明代になると、こうした蛇＝女の物語が次第にふえてくるとともに、蛇＝女がそれなりに人並みの情をもったものとして描かれるようになる。中国の民間文学の研究者である祁連休によれば、「宋元の時期には、人と妖怪との結婚と恋愛の物語が、なかでも雌を主人公とするものが多く、狐と蛇は最も多い。人と恋愛する蛇精は、唐代以来の民間の物語のなかで次第に増え、宋元に至ると、突出することになる」¹³という。例えば、『夷堅志』の「銭炎書生」は次のような話である。

広州の書生銭炎は城南の薦福寺で苦学していたが、そこに美女が訪れる。良家の娘であったのがわけあって苦界に沈んでいたが、あなたを慕っている、と。契りをかわし、妊娠する。知人が銭炎がやつれているのをみて、妖怪の祟りであろう、と警告する。法師にもらった符を示すと、女は大小二匹の蛇となって、おずおずと出て行った。

この物語では、蛇＝女が、国家-社会システムの秩序のなかで周縁化され疎外され、言いがたい苦しみのなかにあったことが示されている。だからこそあえて人間の男を誘惑することになるわけだ。あるいは蛇ではないが、このような話もある。

茶店の家僕のもとに突然美しい少女が訪れる。彼女は隣家にきた新婦で、姑の怒りを買って追い出されて、行く所がないのだうったえる。二人は懇ろになり、女はお礼だといって「官券十千」をくれさえる。だが、家僕の兄が見破って、狸という正体がばれる。しかし彼女は、どうして軽々しくばかな兄を信じるのか、と罵って、結局二人はよりをもどす。（「茶僕崔三」）

このように、近世の蛇＝女たちは、伝統的な「悪女」などと異なり、単に邪悪で淫乱な女なのではなく、家父長制的な家族システムや国家システムのなかで苛まれ力を奪われ恨みを重ねた末に化けてしまったとされる。だからこそ、蛇＝女たちは偽りの貨幣を使うなどして国家-社会システムの裏をかいて自らの欲望を成就しようとするのだ。どうやら蛇は、もはや単純に共同体の外部から訪れる男性的な脅威であるだけではなく、あるいは邪悪な女の投影的な形象であるばかりでもなく、正当化されていないのはもちろん十分には言語化もされていない、女たちの欲望（と想像され恐怖され後ろめたく思われるもの）を物語的に表現しはじめているのだと思われる。

¹³ 祁連休『中国民間故事史』宋元篇、秀威（台北）、2011年、59頁。

2-2 「白蛇伝」の形成

こうした流れのなかで、「白蛇伝」（以下、様々なヴァリエーションのある、いわゆる白蛇伝を総称して「白蛇伝」と表記する）の原形と思われる物語が生まれ始める。「白蛇伝」の形成史に关する研究はかなり盛んに行われてきたが¹⁴、要するに「白蛇伝」は、宋代から明代にかけて様々な物語が生み出され語り継がれていくなかで、次第に形成され発展していったものと思われる。

例えば、宋代の語り物をテキストにしたと思われる「孔淑芳双魚扇墮記」は、商売人の若い男が西湖のほとりで侍女に付き添われた女に誘惑されるが、その女は幽霊で男はその妖気のせいで死にかけてしまうものの、真人によって幽霊たちは退治される、といった話である¹⁵。あるいは、『夷堅志』には、「西湖女子」と題する逸話が紹介されていて、西湖の畔に住む、官人の男と関係をもった女が、死んだのち亡霊となって男の前に現れた、という。いずれも蛇の話ではないものの、後の「白蛇伝」と多くのモチーフを共有している。

とくに、明初の小説集『剪燈新話』（瞿佑作）のなかの著名な「牡丹燈記」は注目すべきものであると思われる¹⁶。

明州に喬という妻を亡くしたばかりの若い男がいて、観燈の晩に一人でぼんやりとしている。すると、牡丹燈籠をかかげた侍女の後に年のころ十七八の美女が歩いているのを見かける。喬は自分を抑えることができず女のあとをついていくと、女はふりかえって微笑した。喬は女を自分の家に連れて帰って歓愛を極めた。素性をきくと、元は奉化州の書記官の娘だったが父が亡くなり落ちぶれたので、侍女の金蓮とともに月湖の西に仮寓している、姓は符で字は麗卿である、という。

女はそれから毎夜尋ねてくるようになったが、不審に思った隣家の老人が覗くと、喬が髑髏と並んで座っている。陰界の化物に違いないと老人に諭された喬は慌てて月湖の湖畔を探すが誰も女の家を知らなかった。帰りがけに湖心寺に立寄ったところ、暗室に棺桶があって、「故奉化符州判女麗卿之柩」と書いてあって、側には牡丹燈籠が掛けてありその下には小さな藁人形があって、「金蓮」と書かれていた。

喬は身の毛がよだち、一目散に逃げて、玄妙観の魏法師に助けを求めた。すると、法師が二枚の朱符をくれたので、喬はいわれた通りに、一つを門の一つを寝台に貼ったところ、その晩から女は現れなくなった。ひと月あまり経って、友だちと酒を飲んで酔ってしまい、法師の戒めを忘れて湖心寺のほうの路を通った。すると寺の門から金蓮が出てきて、喬をひっぱっていく。暗室のなかに

¹⁴ なお少し前に、河南省の許家溝村に伝わる話として「白蛇鬧許仙」と題するものが孟繁仁という人によって報告された。彼はこれをもって「白蛇伝」の起源と主張している（孟繁仁『《白蛇伝》故事源流考》『歴史月刊』（台北）第173期、2002年、范金蘭『「白蛇傳故事」型變研究』萬卷樓（台北）、2003年、など）。地名の整合性等から考えて、「白蛇伝」が河南省のこの村を起源とする可能性はある。しかし、今日伝わっているこの話には、「盜草」や「祭塔」のモチーフが含まれていて明清代の「白蛇伝」の発展を明らかに取り入れている。それゆえ、仮にこの村で発生した物語が何らかのかたちで「白蛇伝」の起源の有力な一つであったとしても、現在にまで伝えられた内容のほとんどは逆輸入されたものと推測される。

¹⁵ 今西凱夫訳『熊童峯四種小説』『中国古典文学大系』第25巻、平凡社、1970年。

¹⁶ 飯塚朗訳『剪燈新話』『中国古典文学大系』第39巻、平凡社、1969年、竹田晃他訳『中国古典小説選』第8巻、明治書院、2008年。

入ると、麗卿が現れて、喬の薄情を責めて、その手を握って、柩のなかに一緒に入ると、棺の蓋は閉じられてしまった。

隣家の老人が僧に頼んで柩をあけてもらおうと、喬は女の屍と抱き合うようにして死んでいた。寺の住職は二人を葬ったが、その後、牡丹燈籠を点けた少女をつれた喬と麗卿の姿が見えることがあって、それを見たものは重い病気になった。土地の者は恐れて、四明山の鉄冠道人に依頼し、道人は三人の邪鬼の罪を明らかにして、「九幽の獄」に送り込んだ。

「牡丹燈記」は、先の「李璣」に似たところがあり、また「京師異婦人」（『夷堅志』）には細部まで合致しており、それを潤色したものであるようだが、語り口が優れており恐怖感が生々しい。そして、女は蛇ではなく幽鬼であるものの、やはり「白蛇伝」と共通の要素が非常に多い。すなわち、独り身の男、侍女を連れた美女、水辺でのドラマの展開、本性がばれること、法師による退治、等々であるが、とりわけ注目されるのは、女＝幽鬼の人生と深情が丁寧に描かれていること、そしてその女＝幽鬼が男にとってはそれが魅惑でもあり恐怖でもある、そのようなより深い両義性をもっていることである。なお、馮夢竜の『情史』には、「牡丹灯記」と同じように、侍女（「青衣」である）を連れた美女が若い男を誘惑して道人に退治される話があるが、この話では女の正体は巨大な蟒（うわばみ）とされている¹⁷。こうしたことから、「牡丹燈記」は「白蛇伝」の最も重要な先行作の一つであると考えられる。

さらに「白蛇伝」の直接的な原形とされる物語が生まれる。それは、「西湖三塔記」（明の嘉靖年間に洪楸が刊行した『清平山堂話本』に入っている）であって、中国文学者の青木正児はこれが白蛇伝の原形であるようだとしている¹⁸。

奚宣贊という青年が西湖のほとりへ遊びに出たところ、白い絹の着物をきた白という名の女の子が迷子になっていたの、家に連れ帰った。すると十日あまりして黒衣の老婆があらわれ、迷子の祖母だという。お礼に家に招かれると、女の子の母だという白衣の美女が歓待してくれる。ところがそこに、二人の壮漢が現れて、肴にしようと、若い男の腹を割いて肝をとりだす。宣贊は驚愕するが、それでも女と寝てしまう。引き止められて同棲すること半月、家に帰りたいというとおまえはもう用済みだからと肝をとられそうになるが、白に助けられ、帰宅する。

翌年の清明節、再び老婆に会って、結局女と半月をすごし、また殺されそうになるが、今度も白に助けられてなんとか帰宅する。叔父の真人が、甥に妖怪がついているのを知って、神将を使わして、三人を退治してくれる。三人は、宣贊の家が水門を防いでいるのを恨んでいたらしい。三人（そのうちの一人、白衣の美女は白蛇であった）は三個の石塔で西湖の中に鎮められた。¹⁹

ここでは、蛇＝女は極端に残虐な妖怪にすぎず、そのため蛇の物語の発展段階としては逆行しているようにみえる。実際、この物語は宋代の語り物に基づくものであろうとされ

¹⁷ 卷二十一、『情史』浙江古籍出版社（杭州）、2011年。

¹⁸ 『江南春』平凡社東洋文庫、1972年。

¹⁹ 入江義高訳『清平山堂話本』『中国古典文学大系』第25巻。

る。しかし、舞台・季節・名前など多くの点で「白蛇伝」と類似しているし、蛇＝女の恐ろしさが比類なく鮮烈であることが注目される。

3 「白娘子永鎮雷峰塔」

3-1 プロット

「白娘子永鎮雷峰塔」は、馮夢竜が1624年に刊行した小説集『警世通言』に収められたもので、先に紹介しものをはじめとしたそれまでの蛇や幽鬼をめぐる様々な話を総合したもので、語り口が際立って巧みであり、いわゆる「白蛇伝」の最も優れた作品となる。

以下、少し長くなるがそのプロットを記す²⁰。

西湖は山水鮮明の湖で、白楽天や蘇東坡が手を入れて、三百の寺院が山に隠れている。宋の紹興年間、その西湖のほとり、杭州臨安府に李仁という男がいて、南廊閣子庫の募事であった。家には妻がいて、妻には許宣という名の二十二才になる弟がいた。二人の父は薬屋をしていたが、父母ともに早くに亡くなり、許宣は姉夫婦の家に住みながら、李幕事の弟の李将士の生薬屋で番頭をしていた。

ある日、許宣は僧侶に請われるままに姉と李将士に断りを言ってお叔塔へ焼香をしに行くことになった。時はちょうど清明節で、帰路、にわか雨が降り出して、許宣は船を借りて乗った。すると、青い服の侍女を連れた、服喪の髻を結った白絹の衣の美しい婦人が船に乗せてもらえないかと声をかけてきた。許宣が許すと二人は乗りこんできて、お互いに自己紹介をした。女は「自分は白殿直の妹で張官人に嫁しましたが、不幸にして先立たれてしまいました。今日は夫の墓参りの帰りなのです」などと言う。船が岸について、許宣は婦人に傘を貸して、二人と別れた。その夜、許宣は白娘子（白婦人の意）のことを思って眠られなかった。

明くる日、許宣は白娘子が住んでいると言っていた双茶坊巷を探したが、誰も彼女の家を知らなかった。すると例の青い服の侍女がやってきたので、彼女に家を案内してもらった。たいへん瀟洒な家で、婦人は許宣を歓待してくれた。酒を飲みかわすうちに二人は打ち解けて、婦人は、「あなたとは宿世の姻縁があって、はじめてお会いした時から好意を寄せていただきました」などと言う。許宣もまた本当に素晴らしい縁だと思ったが、結婚するにしても先立つものがないと心配になった。すると婦人は許宣に包みを手渡してくれた。みると中には五十両もの雪花銀子があった。

許宣は帰宅して、翌日にはさっそく銀子を使ってご馳走の準備をして、姉夫婦をもてなして、結婚の話をして、姉に例の銀子を預けた。ところが、李幕事はその銀子を目みて「一家が滅びる」と叫んだ。数日前に邵大尉の庫で盗まれた銀子と刻印の番号が一致するというのだ。やむをえず李幕事が臨安府に訴え出たので、許宣はすぐに捕まって詮議をうけた。許宣は慌てて、双茶坊巷の白という女からもらったものだと言明をした。捕吏たちはさっそく双茶坊巷の女の家に行ったが、古い陋屋があるばかりでとても人が住んでいるようには見えなかった。しかし、奥の間に入ると、そこには一人の色の白い女が座っていた。捕吏たちは捕まえようとしたが、女の姿は消え失せて、銀子が四十九錠残されていた。

²⁰ 徐文助校注・繆天華校閲『警世通言』三民書局（台北）、2008年、松枝茂夫訳『三言二拍抄』『中国古典文学大系』第25巻。

許宣は「すべきでないことをした」という罪で蘇州へ追放となった。蘇州で許宣は、心苦しく思った義兄らの計らいで、宿屋をやっている王主人のもとに預けられた。半年ばかり無聊をかこっていると、王主人が「お客さんですよ」というので会ってみると、それはかの白娘子と侍女の青青であった。許宣は驚きかつ怒ったが、白娘子が「あの金は亡夫が残したもので、好意であなたにさしあげたもの。どうして手に入れたのか私も知りません」などと釈明をしたところ、許宣は早くも白娘子にたいする疑念を解いてしまった。王夫婦の計らいもあって、十一月十一日に二人は天地を拝して結婚式をすまして、魚と水のように片時も離れず楽しい日々をすごした。

翌二月十五日、許宣が友だちと臥仏寺に参拝した帰り、門の外で菓などを売っていた道士が許宣の顔をみて「妖怪がとりついている。たいへんなことになる」と警告した。急に恐ろしくなった許宣は道士に頼んで霊符を二枚もらって、言われた通りに、一枚を髪に入れ、もう一枚を夜中に焼こうとした。白娘子は気がついて、「他人の言うことを信じるのですね」と責めて、霊符を焼いてしまった。翌日、許宣と白娘子は道士のもとにいて、白娘子は道士を罵倒して何事かをつぶやくと道士は空中にぶらさがり、慌てて逃げてしまった。

四月八日のお釈迦様の誕生日に許宣は白娘子に洒落た服をあつらえてもらって承天寺に参拝すると、質屋の周氏の庫に盗賊がはいって金銀衣服の類が盗まれたという噂をきいた。すると、許宣とすれ違った男が、許宣の服や持ち物は盗まれたものだと言いきり騒ぎはじめた。許宣はすぐに捕縛された。許宣が妻にもらったものだと言ったので捕吏はさっそく白娘子を探したが、盗まれたはずのものが周の元の庫にあったという知らせがきた。そこで許宣は許されたが、今度は「妖怪のことを訴え出なかった」という罪で鎮江府へ送られた。

再び義兄の口利きで今度は生薬屋の李克用という人の世話になることになった。許宣は番頭として働きたが、店の人たちと飲んだ帰りに、ふとある二階屋に目をやると、そこには白娘子がいた。許宣は「妖怪め」と罵ったが、白娘子は、「あの着物は夫が残したものです」などと釈明し、「わたしたちの愛情は泰山のように高く東海のように深く、生きるも死ぬも一緒だと誓いあった仲ではありませんか」と訴えた。またしても許宣は色に迷って白娘子を許して、元の通りに夫婦になった。ところが李克用は好色で、厠に入った白娘子を手込めにしようとした。だが、厠には白い大蛇がとぐろを巻いていて、李は驚愕して気を失ってしまった。白娘子は許宣に訴えて、二人は李の家をでて、白娘子の金で近所で小さな生薬屋を営むことにしたところ、商売は意外にも日に日に繁盛した。

七月七日、許宣は友人に誘われて金山寺に参拝に行くことになった。白娘子はなぜか心配して止めようとしたが、許宣は舟にのってでかけ、金山寺に到着した。すると、法海という禪師が許宣をみて、あれには妖気があると言って、侍者によびにやらせた。許宣が帰ろうとすると、ちょうど白娘子と青青が飛ぶような早さの舟にのって迎えにきたが、禪師が怒鳴りながら禅杖をふりあげると、白娘子と青青は水の中に飛び込んでしまった。許宣が禪師にわけをきくと、「あれはまぎれもなく妖怪なのだ」という。

ちょうど恩赦が行われたので、恐れた許宣は急いで故郷の杭州に帰って義兄を頼った。ところがそこにも白娘子と青青が現れた。怯え切った許宣をみて、白娘子は腹をたてて、私を疑うなら「この街を血の海にして、一人残らず大波に吞まれて濁水に沈んで、非業の最期を遂げさせますよ」と言う。慌てた許宣がわけを話して助けを求めると、義兄は戴という蛇探りを紹介してくれた。しかし、白娘子の正体をみた戴は恐れをなして、逃げてしまった。そして白娘子は許宣の不実をなじって再び「街のすべての人々を巻き添えにして、非業の最期を遂げさせますよ」と言う。

許宣は恐ろしくなって家を飛び出して、どうしようかと途方にくれて湖に飛び込もうとしている

と、法海禪師が現れたので、許宣は命乞いをした。すると禪師は鉢盂をさずけてくれた。家に帰って、許宣は禪師に言われた通りに、隙を見て白娘子の頭に鉢盂を被せた。すると、女の形はだんだん小さくなって、とうとう鉢盂ばかりとなった。そこに禪師が現れて、なぜ執拗に人に纏わるのかと白娘子に問い正した。すると彼女は、「私は大蟒蛇（おおうわばみ）で、嵐のときに西湖に来て青青とくらしていました。許宣にたまたま会って春心が蕩然となりこんなことになりました。確かに天の掟は破りましたが、命を害してはいません。禪師さま、どうぞお慈悲を」と言った。禪師は千年修練するならば命は助かるといって、蛇と魚（青青）を鉢盂に入れて、雷峰寺の前に埋め、その上に塔を建てさせた。その後許宣は寄進を募って七層の宝塔を建てた。禪師は四句の偈を留めた。

「西湖水乾 江湖不起 雷峰塔倒 白蛇出世」。

許宣は法海禪師の弟子となって、雷峰塔で修行を積んで後、座禅したまま往生した。

3-2 太母としての白娘子

このように、物語のプロットは、白娘子への信と不信の間でゆれうごく許宣のありさまを軸にして組み立てられており、物語の中心的なテーマが、蛇＝女の形象をめぐるものであることがわかる。

それにしても、この白蛇＝白娘子とは何者なのだろうか。白蛇＝白娘子は、やはり、先に触れたユングらのいう「太母」という概念によくあてはまるだろう。「太母」とは、人々の心の深層にある様々な心的イメージ＝「元型」の一つであり、それは人が生まれ成長することを促すとともに、人を支配し呑み込み死にいたらしめもする、そのような魅惑と恐怖の原初的な心的対象である。ジュリア・クリステヴァは、こうした母をめぐる深層心理学的な洞察を理論的に発展させて、快楽と恐怖の両方の起源であるがゆえに、人が魅惑され恐怖しもおぞましい対象（すなわち abject）の重要性を指摘し、その対象を棄却（abjection）しようとすることを一つの契機として、人は母とともにある前言語的な段階から言語的・社会的な象徴秩序へと参入するのだ、とした²¹。

白蛇＝白娘子は、まずは、この「太母」の否定的な側面を臆面もなく発揮する。蛇は元来ものを言わない非言語的でおぞましい存在である。そして、白蛇＝白娘子は、どこからともなく現れて、社会の法を侵犯し男たちの安寧を脅かしながら、おのれの欲望を実現しようとしていく。許宣は、そのような白蛇＝白娘子に強く恐怖しながらも深く惹かれて、白娘子に呑み込まれてその社会性を繰り返し奪われ命までも危険にさらされることになる。だからこそ許宣は彼女を「棄却」しようと必死になるのである。

しかしながら、白娘子は、麗卿やこれまでの蛇＝女たちよりも、自分が取り憑いた男にたいしては誠実であるようにみえる。許宣に何度裏切られてもあきらめず追いかけて説得し何と

²¹ ジュリア・クリステヴァ（枝川昌男訳）『恐怖の権力 ― アブジェクション試論』法政大学出版局、1984年、田中明子「女性と自己愛 ― クリステヴァの一次ナルシズム論にみる癒しからの成長」日本女性学会会誌『女性学』第5巻、1997年。なお、井波律子は、白娘子の原型の一つである「西湖三塔記」の白衣の美女について「「アブジェクション」を、妖怪化したもの」としている。『中国のグロテスク・リアリズム』中公文庫、1999年、294頁。谷口義介『逃げる男・追う女 ― 東アジアの説話半月弧』現代思潮新社、2011年。

か関係を修復しようとする彼女の様子は、息子に執着する母親のようであり、白娘子にはよい母親の側面もあることがわかる（ちなみに、日本語の語感と違って、「娘子」には、日本語でいう「娘」ではなく、「奥さん」、「おばさん」、「お母さん」というニュアンスが強い）。「白娘子永鎮雷峰塔」の物語の面白さは、こうした太母的な両面性のいずれも巧みに描きながら、白蛇＝白娘子が、結局のところ本性の邪悪な蛇で棄却しなければならない対象なのか、それとも深い愛情をもった母のような女なのか、許宣にも読者にもなかなかわからないということにある。

3-3 新しい社会のなかで

もう一つの、この「白娘子永鎮雷峰塔」のユニークの価値は、当時の中国社会の新しい発展を物語のなかに巧みに織り込んでいることにある。宋代に入ると、中国社会はその中世的な分裂と不安定の状態から離脱して、中央集権が著しく進み政治的・軍事的に安定し、イデオロギー的にも世俗性の高い儒教が優勢となるとともに、とりわけ南宋以降、貨幣経済が伸張し市民文化が興隆したことは広く知られている。異民族の侵入によって争乱と分裂を再び経験した元代をはさみ明代にいたると、そうした安定と発展の傾向はいつそう進展し、以後中国社会は二度と大きな分裂を経験しない。一言でいうならば、宋代以降の中国社会は「国家化」していくのである²²。

宋代に生まれ明代に発展した「白蛇伝」の一つの頂点である「白娘子永鎮雷峰塔」においては、こうした同時代の社会の発展が、許宣という視点人物の造形によく現れている。彼は、それ以前の物語によく出てくるような科挙合格を目指す伝統的な知識人でもなければ、乱暴な豪傑でもない。彼は両親に早くに死に別れて、大都市である杭州で商売に携わり西湖でささやかながらもお洒落に遊んだりもしている。つまり許宣は、伝統的な文化からも家族・宗族からも貧乏からもかなりの程度自由なのである。さらに、その身軽さに応じて、彼は他者にたいしてわりと対等につきあおうとする傾向があり、それでいてしばしば他者に懐疑の目をむけ自分自身のことも反省し、全体的に知的で自省性が高い。つまり、彼は近世的で都市的といってよい若者なのである。日本でいえば、浄瑠璃・歌舞伎などでいういわゆる「二枚目」によく似ている。彼らは自由で、しかも周りの意向に流されやすい弱さもあるので、女の主人公の生き様をよく映し出す、という脇役としての長所もある。

また、こうした新しい近世的で都市的な社会状況は、貨幣をめぐる逸話としてもよく反映されている。白娘子は「雪花銀子」を役所の庫から盗むのであるが、この違法行為はたちまち公的機関の知るところとなる。白娘子はかろうじて逃げるが、許宣は捕縛され処罰されてしまう。物語の中でこうした違法行為とそれゆえの捕縛と処罰が繰り返されるのだが、ここには、すでに中国社会が、貨幣と法律の原則が政治的権力に裏打ちされて例外なく貫かれるような、国家化された安定した社会になっていることがよく描かれているとともに、白娘子

²² 宋代をもって近代の開始とする歴史観の最も雄弁なものとして、宮崎市定（瀧波護編）『東洋の近世』中公文庫、1999年。

がそうした社会に挑戦する存在であることも示されている。貨幣経済の原則を侵犯する存在としての精怪というイメージは、すでに「李璿」や「茶僕崔三」にもあったことは先に示したが、この「白娘子永鎮雷峰塔」では、貨幣経済を含んだ国家-社会システムとの対決がより鮮やかに描かれているといえる。

この後、物語の中心は、白娘子らと法海禅師との対決に移っていくのだが、この対決もまた、国家-社会システムとの対決であり、いっそう劇的になっているといえるだろう。法海はむろん禅師であるので一見宗教的な権威を体現しているようにみえるが、しかし彼が白娘子を非難するのは、宗教的な理由ではなく、むしろ家族的な秩序を乱すな、非公認の性的関係をもってはいけない、許宣の命を脅かすな、といった世俗的で習慣的な価値ゆえである。それゆえ、法海とは、その名に含まれるように、この国家-社会システムの「法」の知的で権威的な体現者なのである。よく知られているように、歴史社会学などにおいては、近代の国家化された社会においては次のような分裂と緊張があると考えられている。すなわち、公的な領域 — 貨幣と法律の原則が貫徹される領域 — と私的な領域 — 貨幣と法律ではなく個人間の親密な関係で成り立つ領域 — とである²³。中国では、「白蛇伝」について「反封建礼教」などと公式的に評価されることが多いが、しかし、ここに表現されている対立は、封建とか礼教といった前近代的なものの対決というよりは、むしろ近代的なもののなかに展開する公的な力と私的な領域における価値との対決といった方がよりよく本質を捉えられると思われる。そして、以前の蛇の物語にはなく「白蛇伝」に新たに登場する雷峰塔とは、まさにこの近代的で公的な構造と力の象徴に他ならないのであって、だからこそ私的なものの象徴である白娘子はこの塔のもとに鎮圧され閉じ込められることになったのだと考えられる。

3-4 私的な世界の優越

さて、この新たに生み出された私的な領域において想像される価値とは何であろうか。それは、まだこの「白娘子永鎮雷峰塔」では十分には表現されていないのだが、「宿世の姻縁」「天生的一对」などといった言葉で理想化されている性愛的で排他的な異性愛を重じる文化の萌芽がみられるとあってよいだろう。おぞましい蛇の化物であるはずの白娘子が、実は許宣という一人の男を深く一途に愛する女なのかもしれない、そこにこそ真実があるのかもしれない、ということをこの物語は暗示している。

排他的異性愛というものを価値あるものとすることは、ヨーロッパ史の文脈でも日本においても「近代性」の一つのメルクマールであるが²⁴、中国においてもそれなりの歴史的な蓄積をもつ。例えば「白蛇伝」以外の「四大伝説」とされるもの、すなわち「牽牛織女」「孟姜女」「梁山伯と祝英台」のいずれもがそれぞれのかたちでほぼ同様の価値を物語的に表現していると思われるが、それらが広く伝承されるようになるのは、ごく大雑把に言って、おおよそ

²³ 近代社会における公私の分離についての社会学的研究には膨大な蓄積があるが、わかりやすいものとしては、アンソニー・ギデンズ（松尾精文・松川昭子訳）『親密性の変容』而立書房、1995年。

²⁴ このことについては詳しくは、川田耕『隠された国家 — 近世演劇にみる心の歴史』世界思想社、2006年。

宋代以降であるようだ。そのなかにあつて「白蛇伝」がとくに注目すべきなのは、そのような排他的な異性愛を、社会的・公的な力との鋭い対立のなかで描きながら、そこに女の強い欲望を表現していることにある。己の欲望の実現が法海によって阻まれようとしたとき、白娘子は、「この街を血の海にする」「皆に非業の最期を遂げさせる」などと、世界の破壊さえも恐れない勢いで怒る。ここには、これまでの蛇＝女が示してきた以上の、激しい暴力・破壊への意志があり、もともと蛇という形象がもっていた原初的な恐怖の力さえも垣間みられる。それゆえ、新しい私的な領域とはおぞましい情念のうずまく世界でもあることが暗示されてもいる。

こうした女の欲望の強烈な叫びこそが、「白娘子永鎮雷峰塔」の真骨頂であり、その後の「白蛇伝」の発展を促したと思われる。

4 「白蛇伝」の発展

明末の「白娘子永鎮雷峰塔」は、その後の「白蛇伝」の発展のベースとなり、様々な「白蛇伝」がそれ以降清代、さらには民国期以降にも生み出され引き継がれていく。それらは、ジャンルでいえば、昆劇や京劇をはじめとする各地の地方演劇、あるいは宝巻・昆曲・弾詞・評詞・小説など、あらゆる種類の芸能のなかに流入しており、「白蛇伝」は中国人なら誰もが知っている物語へと大成していく²⁵。そしてその大成のなかには、「近代的なもの」の要素がいつそうはっきりと見られるようになるといえるだろう。

なかでも、乾隆年間に生まれた方成培の『雷峰塔傳奇』（1771年上演）はその大成の代表であるといつてよいだろう²⁶。これは、芝居通の乾隆帝が江南を訪れたさいに皇帝のために上演された演劇であり、「轟動大江南北」というほど大いにもてはやされたという²⁷。大筋は「白娘子永鎮雷峰塔」に似ているが、その後定番になっていく新しい場が多く織り込まれている²⁸。

とくに重要なのは、次の四つの場で、これらは今日にいたるまで昆劇や京劇でも定番となっている。

「求草」（他のものでは「盗（仙）草」）：白氏（白娘子）の正体を目撃して驚愕のあまり死にかけている許宣を蘇らせるべく、白氏は嵩山の南極仙翁のもとへ行つて魂を戻す仙草をもらいにいく。しかし仙翁は蟠桃大会に招かれて留守であつたので、仙草を守る仙童らと戦う。帰つてきた仙翁に白氏がわけを訴え、白氏と許宣には「宿縁」があるからと言って、仙草を分け与えてくれる。

「水闘」：法海に捕らえられた許宣を求めて、白氏と青児は法海のいる金山寺におしかける。白氏

²⁵ 『白蛇故事研究』、『白蛇伝集』明文書局（台北）、1981年、何平主編・莫高編著『白蛇伝説』浙江攝影出版社（杭州）、2008年。いずれにも「白蛇伝」が多彩な芸能に流入したことが記録されている。

²⁶ 方成培撰・徐凌雲校點『皖人戯曲選刊・方成培卷』黄山書社（合肥）、2008年。

²⁷ 趙景深「白蛇伝考證」王秋桂編『中国民間伝説論集』聯經出版（台北）、1980年。

²⁸ 今日残っている、「白蛇伝」の演劇用の脚本の最初は、黄図珽の『看山閣楽府雷峰塔傳奇』（1738年刊）である。またその後、方成培以前に、陳嘉言とその娘による、「梨園抄本」と通称される演劇用の脚本があつて、そこに「盗草」「水闘」「断橋」といった場があつたようだ。

は、「私は夫を天として敬い、何も彼を害していない」「夫婦を別れさせて、どこに天理があるのか」と主張し、さらに「恨、恨、恨」と激しく法海を罵る。法海は護法神をよび、白氏は青児とともに水族を率いて、激しく攻防する。法海らは白娘子を捕まえようとするが、白氏が文曲星を懷妊しているために、捕まえることができず、やむをえず許宣を解放する。

「断桥」：西湖の断桥で、出産間近の白氏は許宣と再会する。許宣は法海の讒言を信じて妻を信じなかったことを詫げる。白氏は許宣にたいして、恨みもあるが許したくもあるという気持ちを縷々述べて、最後には、「悪いのは許さんではなく、法海だ」といって、青児の反対を押し切って、許宣を許し、三人は出産に備えることになる。

「祭塔」：許宣と白氏の息子許士麟（他の「白蛇伝」では、士林、あるいは夢蛟）は長じて状元となって、皇帝の許しをえて帰郷して母親が鎮められている雷峰塔を祭る。彼は「父は讒言を誤って信じた」と言って母を無罪とみなして慕っており、法海のことは、母を陥れた賊だと言い放つ。息子の懇願ゆえに塔から白娘子はでてきて、息子と再会する。母は「もうこうなったのだから悲痛にならないで。ただあなたが夫婦円満であることを願います。決してあなたの父のように薄情にならないで」と願い、「今日別れたら二度と会う日はありません」と言って、二人は別れる。

まず注目されるのは、白蛇＝白氏はもはや邪悪な蛇ではほとんどない、ということである。たしかに白氏はまだ多少は怪しげで、執拗に許宣を追いかけては彼を恐怖させるし、公金や宝の頭巾を盗み、大洪水も起こし、「恨、恨、恨」などと激しく怒る。しかしながら、それらの行為はみな、結局は夫との関係を守るためであり、もはや邪悪というようなものではない。白氏の許宣への愛着・愛情はむしろ相当に理想化されており、「求草」と「水闘」の場によく表現されているように、彼女は夫の命を助けるために自分の命を賭すことをも厭わないのである。

このように白蛇の悪が削ぎ落され善良になる傾向は、この演劇の以前からみられ、例えば、清初に現れた古吳墨浪子の小説『西湖佳話』のなかの巻十五「雷峰怪蹟」のプロットは、「白娘子永鎮雷峰塔」のものにかなりよく似ているが、白娘子の、「この街を血の海にする」などといった恐ろしい呪詛の言葉は削除され、白娘子の「蛇性」とでもいうべき不気味な部分がいくらか少なくなっている。また、1809年に出版された弾詞『義妖伝』は、数々の「白蛇伝」のなかでも「最も詳細なものの一つで、この物語のすべてのなかで最高の達成」²⁹と評価されることさえあって、とくに白素貞（白娘子）の生き様が詳しく描かれているのだが、銀を盗むことや大洪水を起こすことなどの悪事はすべて兄弟子の黒風大王のせいだということになっていて、白素貞はいかなる悪事もなさず、許仙にたいする愛惜はいっそう切々と表現されている。さらに、白蛇が人間界に下りたのは、前世における恩に報いるためだという説明がはじめてなされている。つまり、白蛇は、最初から最後までずっと健気にも道徳的な貞

²⁹ 「白蛇伝考証」184頁。

女なのである³⁰。名前もこのころには、「白娘子」よりも「白素貞」とされることが多くなり、貞女にふさわしくなっている。

なお、白蛇＝白素貞の理想化は、近年に中国各地で採集された「白蛇伝」系の民話においてもよくみられる。それらの多くは、「白蛇伝」のメインのプロットはあまり語らず、白蛇ないし許仙の前世における因縁を語る場合が多く、「白蛇伝」が中国の一般の人たちにとって周知の物語であることがわかる。そして、白蛇＝白素貞はどの民話でもまったくの善玉であり、彼女が許仙と結婚したのは前世の恩に報じるためなどと説明されている場合が多い。例えば、父母に死に別れて孤独であったまだ幼い許仙が草むらで白蛇をみつけてこっそりと養って命を助けてくれて、その恩に報いるべく、偶々仙丹を飲んで美女になった白蛇が許仙と結婚したのだ、といったプロットである³¹。このように、許仙も薄情さなどを責められることはなく、当然のように善玉である。

こうした白蛇＝白素貞の理想化にともなって、あの社会-国家システムとの対決も、より白素貞の道徳的な正当性を明らかにする展開になっている。「天理」は、法海＝公的権力にはもはやなく、法海は端的に「賊」などと非難され、むしろ、正義は自分たち＝私的な夫婦の側にあり、にもかかわらず自分たちの邪魔をする法海にたいして白素貞は激しく怒ることになる。法海によって塔の下に鎮圧されて、反省したかと昔の仲間に問われても、「前世からの因縁なのだから後悔してどうするのでしょうか」（方成培『雷峰塔伝奇』）と少しも反省せずに言い放っていることは、白氏が相当に正当化されていることをよく表している。一方、法海はいつそう正当性を失い、玉山主人の『雷峰塔奇伝』（1806年刊）では、あるいは多くの民話においては、法海はもと蝦蟇の精であり、修行中に白蛇に丹薬を奪われて修行がふいになり、それゆえ白蛇に私怨を抱くにいたった、とまで矮小化されている。

なお、こうした国家-社会システムとの先鋭的な対立とそれにともなってある種の反国家的な民衆的価値観とが表現されることは、「白蛇伝」だけの特質なのではなく、宋代以降、とくに明代以降の中国の物語にはよくみられることである。かの『三国志演義』や『水滸伝』あるいは『金瓶梅』なども国家的・社会的秩序への大胆な挑戦の物語として読めるし、また、「十兄弟」や「百鳥衣」といった民間で伝承されていた皇帝を殺す物語などにはとりわけそうした秩序転覆的な志向がはっきりとみられる³²。「白蛇伝」もまた、こうした近世の民衆たちの想像力のなかで発展したものと思われる。

さらに、この方成培以降の「白蛇伝」ではしばしば、あらゆる出来事はすべて釈迦牟尼仏の思召しなどとされている。そもそも白蛇はもと仙界の仙女であって、縁あって下界に下りた、などと説明され、そして最終的には、「この妖蛇は清規を破ったが、しかし許宣と

³⁰ 阿部泰記『『白蛇伝』の発展 ― 怪談から報恩譚へ』山口大学アジア歴史・文化研究会編『アジアの歴史と文化』第2巻、1995年。

³¹ 「許仙と白蛇」黄樹林主編『中国民間故事全書 上海・徐匯巻』知識産権出版社、2011年。

³² 川田耕「皇帝を殺す ― 中国における至高者を殺害する物語の予備的研究」『京都学園大学経済学部論集』第23巻第1号、2013年。

の宿縁があるので」（方成培『雷峰塔伝奇』）などといって許されるのである。つまり、確かに白蛇は、国家-社会システムの法を犯してはいるが、慈悲深いお釈迦様によってその「情」は理解され道徳的なものとして評価され受け入れられているのである。

白娘子が善良になり道徳的に強い正当性を得たことに応じて、物語全体の中心的なテーマもいつのまにか変わっていて、男が蛇＝女に魅惑されながら恐怖し排除する物語から、むしろ女自身の欲望とその成就の物語へと展開している。先に紹介した四つの段のいずれにおいても、許宣は脇役にすぎず「断桥」以外ではそもそも登場しない。そして最後の「祭塔」では、許宣は「薄情」と簡単に片付けられてしまう。明らかに、主客は転倒して、「白蛇伝」という演劇の中心は、白蛇＝白素貞の人生のドラマになっている。そして、疑わしいのは蛇＝女ではなく、むしろ許宣のような男たちなのではないか、ということにすらなっていく。この点についても「白蛇伝」の独自の達成なのではなく、むしろとくに清代にすんだ全体的な文化的潮流と共振するなかで生まれたものであろう。清代には演劇全体が女性の観客の嗜好にそうものになっていったし、また明末以降に発展する弾詞とよばれるジャンルの小説の多くが明らかに女性向けであり、なかには女性によって書かれたものもあった³³。

こうして、かつて不気味で邪悪であった蛇はいつのまにか道徳的に誰よりも正しい存在なのだと、言語的にはともかく、演劇的には力強く表現されるにいたる。さらに、夫婦のあいだに子どもが生まれるという新たなプロットは、蛇＝女の道徳性を超えて、性愛によって生じる生命の流れの意義を表現しているのだと思われる。例えば、「盗草」において南極仙翁が白蛇を助けてくれるのも、夫への情愛の深さに同情したからというのではなく、白蛇が将来文曲星を懐妊する身だから傷つけてはならない、という理由に変わっていき、また『義妖伝』には子に形見として七才までの衣服七着を作る（「成衣」）といった場がある。これらのいずれもが、子どもが生まれ育っていくことの価値の高さを表現しているといえるだろう。蛇は、不気味で邪悪な存在から、異性愛を生きようとする性愛的な女へ、さらにはまさにあの「太母」の生産的な力を遺憾なく発揮して、道徳的な秩序を転覆させながら、生命の流れのなかを生きようとする女へと転変していったのである。

もっとも、この段階で振り返ると、国家-社会システムとの対決のなかで成長した白蛇＝白素貞は、その対決に勝利しながらも、いつのまにかこのシステムの道徳を補完しながらその中に取り込まれてしまっているようにもみえる。この蛇＝女はもはや若い男の肝を取ったりすることはなく、夫への一途な愛着と献身を貫く貞女になってしまったのである。さらに、とりわけ白素貞の息子が状元にまでなつて母を祭るという結末は、女は夫と息子の出世によってのみ称揚されるという伝統的な儒教的な道徳と奇妙なほど合致している。「白蛇伝」の発展のなかには、国家的な秩序を転覆する民衆的な想像力だけではなく、それに多少なりとも取り込まれていく現実的な心性との両方が巧みに統合されて描き込まれているのだと思われる。

³³ 方蘭『エロスと貞節の靴 ― 弾詞小説の世界』勉誠出版、2003年。

なお、ここまで白蛇＝白素貞の存在全体が大きく肯定されてしまうと、演劇としては善と悪との対決という単純で退屈なものになりかねない。そのためでもあろう、方成培『雷峰塔伝奇』以降の「白蛇伝」では、青児は魚ではなく白素貞と同じ蛇（青蛇）になるとともに、青児は多くの場合、率直でユーモアもある性格に造形されるようになる。例えば方成培のものでは、「官人（許宣のこと）のみた目がよくなかったら、まさかあの人と、なんてことはなかったでしょうね」などと澄ましこんだ白素貞を茶化すし、「お嬢さま、万事この青児が何とか助けてあげますよ」などと頼もしい友情を表明したりしている。さらに、『義妖伝』にいたると、小青は白氏が許仙を独占していることに嫉妬して、白氏のもとを去って騒動を起こしたりしている³⁴。つまり、青児は、道德化してしまった白素貞に代わって、自由でユーモア溢れる欲望を体現しているのであって、その意味で「白蛇伝」が失っていったものを回復しようとする役回りになっているといえるだろう³⁵。

5 近現代における「白蛇伝」

5-1 長い近世＝近代のなかの「白蛇伝」

明末から清代にかけての「白蛇伝」を追いかけてみた結果、さしあたって次のようなことが見えてきたといえるだろう。国家化された社会が公的領域と私的領域とに分離し、私的領域においては、必ずしも論理的・道徳的な言語によって言明されているわけではないが、演劇的・心理的には、排他的な異性愛が価値の中心となっていき、その新たな価値が公的・社会的な価値・通念に取り込まれながらも同時にそれを次第に堀り崩してもいく。そのようななかで、排他的な異性愛だけではなく、母子関係の価値をも見いだされるようになり、より豊かで多様な愛情のかたちが表現されるようになった。そのような性愛と生命の流れの発見と尊重が「白蛇伝」にはみられるのであって、それはほとんどまったく「近代的」といってよい傾向であると思われる。

こうした傾向は、少なくとも「白蛇伝」にそくしていえば、清末以降、民国期をへて20世紀もなかばにいたるまで継続し深化していったといえるだろう。この時期、「白蛇伝」はなお中国文化圏において最も著名で人気のある物語の一つであり続ける。小説においては、「前白蛇伝」「後白蛇伝」にわかれ全64回にもおよぶ、夢花館主作『白蛇全伝』がでて、最も詳細な「白蛇伝」となる。昆劇・京劇などの各地の伝統演劇においても、「白蛇伝」のいくつかの場は人気の定番であり続けた。この時期の発展は、内容的には清代の傾向の延長線上にあって大きな発展はないが、話に様々な尾ひれがついてふくらんでいく傾向があり、また演劇・映画では台詞をはじめ演出上の洗練が大きく進んだと思われる。

³⁴ 『白蛇伝』の発展

³⁵ とはいえ、白素貞と青児の性格造形の変化は、白素貞は「花衫」で、青児は「武旦」などといった、演劇における類型的な人物造形の固定化といったことにも起因しているかもしれないが、詳らかではない。

例えば、黄桂秋の戯曲『祭塔』（初演、1955年以前）をみてみよう³⁶。この作品は、黄図珽や方成培の『雷峰塔伝奇』などに依拠しているようであるが、その題名が示すように、「白蛇伝」の最後近くの部分を中心としており、白素貞とその息子許士林の二人を主人公とする。

「母よ」「息子よ」とよびあうことが多いドラマで、とくに母の嘆きの語りが長く、そこで語られるのは、もはや夫婦愛ではなく、母の息子への愛着である。ドラマの結末は、再会した母と息子が再び別れて、もう二度と会えない、という普遍性の高いものになっている。また、京劇の「白蛇伝」のなかで今日最も広く公演されるものとして、1940年代から50年代にかけて改編を続けた、田漢による戯曲『白蛇伝』がある³⁷。大筋は典型的な白蛇伝と同じなのだが、明らかに力点が異なっている。これは男にとっての女＝妖怪の話なのではなく、さらにいっそう、女にとっての愛の物語になっている。そのことは、この演劇で最初に登場するのが白素貞であることに象徴されている。彼女は最初から邪悪な蛇などではなく、天女でありながら美しくも平凡な女であり、許宣は他の作品よりも誠実になっている³⁸。

また、民国期に入り、映画の時代となると、「白蛇伝」はしばしば映画化されるようになる。七十年代までのもので主なものを列挙すると、『義妖白蛇伝』（1926年、上海、監督：邵醉翁、主演：胡蝶・呉素馨ほか）、『白蛇伝』（1939年、上海、監督：楊小仲、主演：陳燕燕ほか）、『白夫人的妖恋』（1956年、日本と香港の合作、監督：豊田四郎、主演：山口淑子ほか）、『士林祭塔』（1962年、香港、広東語、監督：陳皮、主演：新馬師會ほか）、

『白蛇伝』（1962年、香港、北京語、監督：岳楓、主演：林黛ほか、黄梅戯）、『白蛇大鬧天宮』（1975年、台湾、監督：孫陽、主演：嘉凌ほか）となる³⁹。この時期の映画によくあることだが、これらの「白蛇伝」は、粵劇などの伝統演劇の「白蛇伝」をベースにして映画化したもので、例えば、『士林祭塔』と『白蛇伝』（1962年）は、ともに「唱」（うた）と「念」（せりふ）とを交互に重ねていく伝統演劇のスタイルで、とりわけその唱は非常に洗練されている。一例をあげるならば、「你我夫妻非一朝、真情似水何能断、真愛如金不怕燒」

（『白蛇伝』1962年）といった美しい比喻とリズムを重ねる唱がでてくるが、このような洗練は伝統演劇のなかで蓄積され達成されたものであろうことが想像される。話のプロットは先の田漢のものに似ており、見せ場は、プロットの展開というよりは、妻が夫への恨みや許しといった思いを切々と述べるといった細部にあり、「白蛇伝」が演劇・映画の世界ですでに完成の域に達していたことを思わせる。

このように近世から20世紀の半ばすぎまでの長きに渡って「白蛇伝」が発展し持続し洗練を重ねてきた背景には、公式的には正当化されることなく言語化されることも難しかった女たちの欲望が物語的に肯定されていること、そしてそのことに対する女たちの変わることの

³⁶ 『中国京劇流派劇目集成』第20集、学苑出版社（北京）、2009年。

³⁷ 『中国京劇流派劇目集成』第19集、学苑出版社、2009年。

³⁸ 田漢の「白蛇伝」の改編過程とその意義については、松浦恒雄「田漢『白蛇伝』の現代性」中国文芸研究会編『野草』第83号、2009年。

³⁹ 香港では50年代前後に他に5本ほどの「白蛇伝」映画が作られたようである。

ない強い後押しがあったはずである。そこには、いわゆる前近代と近代という区分よりは、いわば長い近世＝近代のなかでの、近代性の持続的な発展をみることができるかもしれない。

5-2 現代の新たな「白蛇伝」

20世紀も終わり近くになると、「白蛇伝」はなお中国人であれば誰でも知っている著名な物語であり続けながらも、さすがにかつてほどの人気はなくなっていったようである。しかしながらなお、時々映画化され、テレビドラマにもしばしばなってきた。それらの現代の「白蛇伝」には新しい傾向がある程度共通してみられ、またいくつかの作品はかなりの独創性がある。ここでは、近世＝近代に発展した一連の「白蛇伝」を理解するうえで必要な範囲で、現代の「白蛇伝」について簡単にふれておきたい。

70年代後半以降の「白蛇伝」の映画としては、『真白蛇伝』（1978年、台湾、監督：陳誌華、主演：林青霞・秦祥林ほか）、『白蛇伝』（1980年、中国、田漢の京劇作品の改編で上海京劇二団によるもの）、『青蛇』（1993年、香港、監督：徐克、主演：王祖賢・張曼玉ほか）、『白蛇伝説』（2011年、中国、監督：程小東、主演：李連杰・黄聖依・蔡卓妍）がある。京劇の伝統に則った1980年の『白蛇伝』は違うが、これらの「白蛇伝」映画にみられる独自の特徴の一つは、役者を近くから撮ることができるという映画の特徴を活かして、白素貞と小青の人間としての姿を視覚的に美しく描いて、しかもそれを怪しげな存在とすることである。それに応じて、白素貞の許仙への思いも、それ以前のように美化されず、どこか邪念のこもったものとされる場合が多い。とりわけ、『青蛇』ではその傾向が強く、女優たちの演じる蛇＝女の身体・存在が、魅惑的でありながら不気味でもある、ということが映画の中心のおもしろさになっている。このような両義性は、かつての蛇の物語とよく似ているのだが、現代の映画では、魅惑と恐怖の両方を体现するのが、蛇の形象ではなく、女の身体・存在そのものになっているのである。それゆえ、かつては蛇という外部に無意識的に投影されていた、男や女たちの不気味な情動が、現代にあっては女たちの形象のなかに投影されることで、より生々しい人間同士の関わりが表現されることになる。近世・近代の「白蛇伝」であれほどに称揚された異性愛の価値はもはやかなり疑われており、互いの欲望は会うことなく悲しくすれ違ふことが多くなる。簡単にいえば、より現代的な愛の物語になっているといえるだろう。

また、香港の小説家李碧華による『青蛇』⁴⁰は、上の映画『青蛇』の原作でもあるが、極めて独創的な「白蛇伝」である。とりわけ興味深いのは、「青蛇」の視点から許仙という男の軽薄な残酷さが徹底的に描かれていることである。青青は、親しかった白素貞が許仙と結婚したことに嫉妬して、許仙を誘惑すると、許仙はあっさり誘惑に乗って一緒に駆け落ちをしようとする。だが、青青は、白素貞を捨てようとした許仙の残酷さに激昂して、最後には許仙を殺してしまうのである。元来の「白蛇伝」でも、許仙の白素貞にたいする薄情さは描

⁴⁰『青蛇』天地圖書（香港）、2011年（原著は1986年発刊）。

かれていたが、そのテーマは十分に突き詰められていたわけではなかった。『青蛇』はまさにそれを鋭く主題とし、さらに女たちの欲望の残酷さをも存分に描くことによって、これまでの「白蛇伝」を大きく読み替えただけでなく、あの近代的で都合のよい排他的異性愛の神話の虚偽性を見事に暴いているのだと思われる⁴¹。

つまり、現代の「白蛇伝」にあっては、もはや蛇の形象をわざわざ借りることはなく、国家-社会システムとの対決もさほど描かれることなく、むしろ、両性間の関係の不気味な深部がより直接的・自覚的に描かれているのである。

6 おわり — 比較史的考察 —

近世中国における蛇をめぐる物語のかくなる発展は、中国文明に独自のものである可能性が高い。蛇に不気味さや邪悪さを投影することは世界各地に普遍的にみられるし、蛇が豊饒の神として信仰の対象となることも古い社会には広くみられた。しかし、「白蛇伝」の系譜にみられるように、蛇を次第に人間化しながら、そこに国家・社会の力学のなかでのたうちまわる女たちの欲望を織り込んだ物語を生み出し広く受け入れられ発展した、ということはおそらく中国文明にだけみられる現象であったと思われる。

蛇をめぐるかくなる歴史的文化的現象の意義は、日本における「白蛇伝」の展開と比較すると、よくみえてくる。日本ではよく知られているように、18世紀半ば過ぎに上田秋成が「蛇性の淫」と題して「白蛇伝」（「白娘子永鎮雷峰塔」と「雷峯怪蹟」にとくに基づいている）を翻案しているが、蛇＝女である真名子は、道成寺伝説と結びついて、老いた蛇の邪神などとされ、残酷に退治されて終わる。「白蛇伝」の原型の一つであろう「牡丹燈記」も浅井了意によって翻案されて「牡丹燈籠」となり、さらに三遊亭円朝が落語にして著名となったが、そのお露も不気味な女に止まる。明末以降の「白蛇伝」の発展は日本では受け入れられることなく終わったようで、結局のところ「白蛇伝」の蛇のみならず、蛇一般が女の妄念や淫乱さの代替的な象徴に止まり続け、中国の「白蛇伝」のような発展をまったくみなかったといつてよいだろう⁴²。

それに比べると、近世の中国社会は表向きは変わることなく一貫して父権的な社会・家族構造と権威主義的なイデオロギーとを保っていたが、その裏側の想像的空間の中では、蛇の物語は大いに発展して、そうしたイデオロギーを次第に掘り崩していったのだといえよう。父権的な構造と権威の比喻である雷峰塔の下に鎮圧されていたはずの不気味な蛇＝女がいつのまにか愛情豊かで生産的なものへと生れ変わっていたのである。そして、かくなる蛇の転

⁴¹ 川田耕『愛の映画 — 香港からの贈りもの』（大隅書店、2011年）は、こうした愛をめぐる幻想と不安に満ちた現代的精神史を、香港映画を分析することによって示そうとしている。

⁴² 例えば、高田衛『女と蛇 — 表徴の江戸文学誌』（筑摩書房、1999年）は江戸文学における蛇を広く踏査しているが、そこではしばしば蛇が女の情念を表現していて、やはり始終、不気味で邪悪なものとされていたことがわかる。また、日本において、蛇＝女の形象が中国のような発展をみなかったことは、近世以降の日本社会の国家化が実は近世中国以上に強く深かったことと関係しているものと思われる。日本社会の近世における国家化とそれにとまらぬ心性の変化については、『隠された国家』を参照。

変のなかに、中国社会の発展のなかで生じた公的領域と私的領域との分離、そしてその私的領域のなかでの核心的な価値としての、排他的な異性愛と家族愛の発見とその力強い発展を見いだすことができる。

だが、そのような愛の物語もまた、新たな神話、新しいイデオロギーであって、だからこそ現代の「白蛇伝」は、その元来の姿に含まれていた不気味な形象を更新しながら、人間相互の不安と不信の物語として新たに展開しなければならなかった。そのようにして、我々はようやく、「白蛇伝」を通して、自らの内なる「蛇」に向き合うことができるのだと思われる。

この研究をすすめるさいに、中国文芸研究会の会員の皆様から貴重なご助言をいただいた。また、JSPS科研費(挑戦的萌芽研究「中国における愛情の歴史—社会学的・文化史的 研究」、研究課題番号:23653138)の助成を受けている。記して感謝したい。